

本書について——発行者より

本書は、一九六〇年代初頭から八〇年代初頭までの二〇年間にわたり、全国各地のハンセン病療養所（奄美、沖縄を除く）を訪ね、療養所の入所者を始めとして、建物・施設、行事などを撮影し、ハンセン病を記録し続けた在日朝鮮人二世の写真家・趙根在（チョウ・ゲンジェ、一九三三年～一九九七年）が、書き（「ハンセン病の同胞たち」「片割れ監修者の私記」「哀哭・上野英信先生」）、話し（「炭坑・朝鮮人・ハンセン氏病」）、聞いた（「八十三年の夢」）文章を収録して一冊にまとめたものである。

小社では、二〇一九年に『在日朝鮮人とハンセン病』（金貴粉著）を刊行した。刊行後に読者の方からは、大別して二つの声をいただいた。ひとつは、これほど多くの朝鮮半島出身のハンセン病患者がいたことに驚いた、ということ。そしてもうひとつは、書籍に収録されている写真を撮った写真家・趙根在の経歴を知りたい、彼の他の写真も見てみたい、ということであった。

趙根在については、私自身、ハンセン病療養所を撮った写真家であるということ以上の情報をもたず、当時において比較的入手しやすかった、二〇一四年に国立ハンセン病資料館で開催された写真展『この人たちに光を―写真家 趙根在が伝えた入所者の姿―』の図録の存在を、後者の声をいただいた方に紹介することしかできなかった。

そうした折り、上記の書籍刊行から四年後の、二〇二三年二月に「原爆の図 丸木美術館」において、趙根在の大規模な写真展が開催された。ハンセン病を撮り始めて六〇余年、没後二五年を経ての美術館施設での初めての写真展であった。本人が写る写真を除いて二〇九点の写真が展示され、内容もハンセン病関連だけでなく、炭鉱の光景、自らの家族を含めた朝鮮人社会を撮影した写真などもあり、まさしく、写真展タイトル「趙根在 地底の闇、地上の光―炭鉱、朝鮮人、ハンセン病―」そのものの写真展であった。写真展は会期が延長されるほどの活況を呈した。

そして、なによりも私にとってこの写真展が意味をもったのは、初公開の写真を目にしたことのみならず、写真展開催にあわせて作成された『図録』に収録されていた、趙が雑誌『解放教育』に一〇回に渡って連載した（一九八五年～一九八六年）文章と出会ったことである。それが本書に収録され、また本書のタイトルともなっている「ハンセン病の同胞（きょうだい）たち」である。

その文章を読み始め、すぐに心惹かれた。ここでは、幼少時の朝鮮人集落の描写に始まり、「らい」をめぐる集落での言い伝え、中学三年で就労した地底の闇Ⅱ炭鉱での過酷な労働体験、炭鉱からようやく脱け出した後にハンセン病療養所を訪ねることになった経緯、そして運よく同胞

（朝鮮人）の理解を得ることができ、「同胞に限って」との条件のもとでハンセン病患者（回復者を含む）の写真を撮り始めることになり、それがきっかけで全国各地の療養所を撮影に訪れていた一九六〇年代半ばまで、年齢でいうと三〇代半ばまでが回想されていた。

文章は、生硬ではあっても力強く、学校教育からではなく自らの肉体を削って獲得したであろう言葉遣いには、独特の味わいとリズムがあった。ある時代を生きた在日朝鮮人二世の精神史が刻まれてもいる、その文章に魅入られた。さらに、趙は在日朝鮮人三世の発行者からすれば父世代であり、その世代が経験した生活に触れていることにも強く惹かれた。多くの人に読んでほしいと思った。それが本書を刊行した理由である。

書籍としてまとめるうえで、「ハンセン病の同胞たち」以外の文章の収録も考え、前述の写真展『図録』の「文献目録」を参考にして、その他の文章も集めた。幸いにして書籍一冊分にふさわしい分量であった。ただし、「聞き」の文章がもう一編あるのだが、残念ながら今回は収録がかなわなかった。朝鮮人女性ハンセン病患者で歌人でもある、趙からすれば姉世代の金末子（執筆名Ⅱ香山末子、詩集『草津アリラン』など、一九二二年～一九九六年）氏が、自身の辿ってきた壮絶な人生を語った内容である。

ハンセン病患者は、当然のことだが、男性が大半を占めていたわけではない。多くの女性がいる。金末子氏の証言は、朝鮮人女性という性格のものであるとはいえ、女性ゆえに引き受けざるを得なかった過酷な患者生活にも触れた、貴重な証言である。機会があれば、後述の掲載誌にあたってほしい。

以下、簡単にその他の収録作を紹介させていただきたい。

「炭坑・朝鮮人・ハンセン氏病」は、『らい』（二八号、一九七一年三月）に掲載された座談の記録である。発行は「長島愛生園らい詩人集団」。同人には、後に『詩と写真 ライは長い旅だから』（一九八一年）を趙と共著で出す銜雄二（一九三二年～二〇一四年）を始め、座談に参加している、しまだひとし（島田等、一九二六年～一九九五年）、沖三郎（一九二〇年～一九八二年）などがある。

座談とはいえ、実質的には、趙根在（当時は村井金一を名乗っており、趙根在と名乗り出すのは『詩と写真 ライは長い旅だから』刊行以降）を囲んでのインタビュートゥといってもよい内容で、趙が写真を撮り始めたきっかけ、その写真を通して訴えかけたい思いが語られている。

なかでも、その当時の患者撮影が「後ろ向き」に撮られていたなかで、自分は「真正面」から撮影していると述べたくだけは、趙の写真撮影にのぞむ姿勢を伝えており、写真家・趙根在を理解するうえで意味深い座談となっている。

ちなみにこの座談がおこなわれた一九七〇年は、写真撮影のための二〇年にわたる趙根在の療養所通いのなかでも、一年の後半年を療養所の訪問にあてた、もっとも長期にわたって療養所を訪ねていた年でもある。一九六一年に多磨全生園での初めての撮影から、約一〇年。自らの人生論にも触れた発言からは、撮影経験を積み重ねたことでのわずかな自信も感じ取れる。

「片割れ監修者の私記」と「哀哭・上野英信先生」は、自らの炭坑夫体験が下地になっている。

「片割れ監修者の私記」では、貧しい家庭を助けるために中学三年で身を投じざるを得なかった坑内労働の様子が描写されている。上野英信（一九三三年～一九八七年）と共同で監修をした『写真万葉録・筑豊』（全一〇巻、一九八四年～一九八六年）の月報に二回にわたって掲載されたものである。「地上の貧苦など地底の困苦に較べれば天国と地獄の差だった」と記すほどの体験をもつ趙が、炭坑関連の書籍として初めて心動かされた、「多くの小ヤマをまわり歩き、あらゆる術謀を弄して坑道へもぐりこんだ」上野英信の体験的ルポルタージュ『追われゆく坑夫たち』との出会いとともに、小炭坑での労働状況が細かに記されている。文面からは、自身の坑夫体験が喚起せざるを得ない各地の小炭坑で働く坑夫たちに寄せる思いが匂っている。

「哀哭・上野英信先生」は、『追悼 上野英信』（一九八九年）に収録された文章である。松下竜一、森崎和江など、上野英信とゆかりのある総勢六二名が執筆しているが、趙もそのうちの一人である。先に紹介した上野の『追われゆく坑夫たち』との出会いが繰り返し記され、「人間社会で坑夫はどのように見られているか」を知ろうと、炭坑関連の書籍を読むなかで手に取った夏目漱石の『坑夫』に対する批判的な評価を記すうえで、『坑夫』が発表された時期に前後して発生した労働争議を列挙して自身の炭坑夫としての矜持を垣間見せてくれる。そして、上野英信に『写真万葉録・筑豊』の監修者として誘われ、共同監修者となるまでの経緯が記されている。「片割れ監修者の私記」と重複する部分もあるが、「私には大の苦手が二つあって、一つは歌でもう一つは文字を書くことであつた……サインペン一本持つのに四百キロの塊炭を持ち上げると同じほどに力

がはいってしまふ」その力を精一杯つかった、上野英信という、恩人であり我が師に対する尊敬と信頼感あふれる追悼文となっている。

この文章中、印象深いのは、上野の自宅を兼ねた「筑豊文庫」の宿帳に記された趙の文字を見た上野が発する言葉によって、趙が救われ、『写真万葉録・筑豊』の第一巻が出た際に共同監修者として自身の名を発見したときの感動を綴る描写である。上野の著作を読むと「臓腑が無くなってしまう」ようで恐ろしいと書く趙根在の、上野英信に対する畏敬の念をともなう、心のこもった一文である。

「八十三年の夢」は、『季刊 人間雑誌』（一九八一年）に掲載されたものである。趙はこの雑誌の第七号（六月）、第八号（九月）、第九号（二月）にグラビアを連載するが、第八号と第九号では聞き書をおこなっている。その第八号での聞き書がこの「八十三年の夢」であり、第九号には先述の金末子の聞き書「川は涙となって」が掲載されている。

話し手の文守奉は一九八八年生まれ（一九八六年）、趙からすれば父世代にあたる。在日朝鮮人一世のハンセン病患者の生涯というだけでなく、戦前の朝鮮半島出身者の境遇と人生が語られなかでも、朝鮮半島でのハンセン病患者の置かれた状況への言及もあり、貴重な証言となっている。

また、文中には、多磨全生園自治会が編集した書籍『俱会一処（くえいっしょ）』（一九七九年）に収録の「文守奉とその同胞たち」と題された文章が引用されているが、そこには、朝鮮人患者の園内における活動が細かく紹介されており、彼らにとつての療養所生活の実情を察することができる。この文章を執筆したのも、また、朝鮮人患者で、趙からすれば兄世代の金相権（一九三一年～二〇一八年）である。

以上、本書収録作について簡単に紹介させていただいたが、付け加えて各収録作には、初出にはない写真を掲載している。内容の理解に資するとの判断と未公開の写真を紹介したいとの発行者の思いからである。とくに「ハンセン病の同胞たち」の多磨全生園の訪問場面では、当時の趙が目にした光景を再現したく関連写真を配した。可能なかぎり初撮影時の一九六一年に撮られた写真を求めたが、すべてが揃えられず、後年の写真もある。さらに使用写真には、デジタル化にともなう画像補正の処理がなされておらず、画質が十分でないものもある。その旨ご理解いただきたい。

なお、写真の選定はすべて発行者の判断であり、「趙根在写真掲載リスト」を本書末に載せ、撮影場所と撮影年、タイトルを記している。

また、各収録作の文章については、趙根在の伴侶であり、著作権継承者の齋藤君子氏の了承を得て、初出とは若干の変更を加えている。詳細については、各収録作のタイトル扉裏の表記を参照していただきたい。

そして、口絵として、「ハンセン病の同胞たち」の生原稿、趙根在の蔵書と書籍への書き込み、ファイルとそこに貼り付けられたメモを紹介している。写真撮影から離れた後の、執筆行為と、

ハンセン病問題を根源から問い直す研究生活の一端を感じ取っていただければ幸いです。

最後に、本書の刊行が、ハンセン病と向かい合って生涯を閉じた、趙根在という存在を広く知ってもらうきっかけとなることを願ってやまない。

(文中の「朝鮮人」表記は、国籍は問わず朝鮮半島にルーツをもつ人びとの総称である)

【参考】

『解放教育』(明治図書出版、一九七一年七月～二〇一二年三月(全五三三号))

「本誌は部落解放をめざし基本的人権の確立を求め民主主義教育の推進を展開する」
(明治図書オンライン「紹介文」より)

『らい』(長島愛生園らい詩人集団、一九六四年九月～一九八〇年二月(全二五号))

「私たちは詩によって自己のらい体験を追及し、また詩をつうじて他者のらい体験を自己の課題とする人々を結集する」
(創刊号「宣言」より)

『季刊 人間雑誌』(草風館、一九七九年二月～一九八一年二月(全九号))

「あたりまえでふつうの人間の、やさしさと哀しみにみちた生き死にを、民族や国家と向きあいながら、記録を中心とする方法によって明らかにしたい」
(創刊号「編集人のことば」より)